

2024年度（令和6年度）

事業計画書

－ 2024年3月13日 －

公益財団法人国際高等研究所

事業計画書

目次

I. 事業活動	
『1』 研究事業	・・・1
『2』 交流事業・人材育成事業	・・・5
『3』 成果の発信	・・・11
『4』 他機関との連携活動	・・・11
II. 法人運営	
『1』 理化学研究所退去に伴う 2024 年度予算額減少とその対応について	・・・11
『2』 資産運用	・・・12
『3』 高等研施設の利用促進	・・・12
『4』 賛助会員制度を含む多様な寄付受け入れの在り方の検討	・・・12
III. 2024 年度（令和 6 年度）財務・収支計画	
『1』 経常収益	・・・13
『2』 経常費用	・・・13
『3』 最終収支	・・・13

公益財団法人国際高等研究所
2024年度（令和6年度）事業計画

私たちは、未知の感染症による世界的蔓延（パンデミック）が、人類に未曾有の危機をもたらせることを経験した。世界が繋がる今日では、世界的な社会・経済活動に大きなダメージを与えた等、人類社会の持続可能性を揺るがしかねない様々な問題を惹起していると言え、今後大きな課題を残している。

一方、人類が共通して希求する世界平和も、一部の地域で勃発した領土紛争によって踏みにじられ、貴重な歴史的・文化的な価値や遺産は都市とともに破壊され、多くの難民を生む結果となっている。安全保障上の国際的な政治問題は解決の糸口が見い出せないでいる。また、地球温暖化によって危惧される地球環境の激変も、持続可能社会の実現にとって大きな障害となり得るものである。

これらの人類的課題は、元を質せば人類自らがもたらせた原因に由来するとも言えるのではない。人間回帰に立ち返り、地球社会の持続可能性を脅かすであろう世界的危機への適応性や回復力を人類が獲得し、それへの適切な対処法を、グローバルな観点から探究することは、学術研究機関である公益法人としての高等研に課せられた大きな責務であることを痛感したところである。パラダイムシフトが要請されるこれからの新たな社会像を求め、人類社会の持続可能性についての根源的な課題を学術的に探究し、混迷する世界への処方箋を世界に向けて発信することが、高等研に課せられた喫緊の課題に他ならない。学術機関としての使命が問われている。

以上のような新たな研究戦略の意義及び事業活動を進める背景を踏まえ、2024年度の事業活動は、学術研究機関として学術研究に課せられた責務を果たすべく研究者の結集を図る研究事業を中心に据え、「けいはんな万博2025」のテーマにも繋がり得る若手研究者の育成を狙う方策の具体化を図る必要がある。さらに公益法人としての使命として、一般の住民を対象とする公開事業の充実・強化を推進するものとする。

分野を越えた研究者が自由な立場で一堂に会し、討議することを旨とする高等研の趣旨を踏まえ、広く社会の動向を見極めながら事業展開を図るとの目標を掲げ、高等研の各種事業活動を行うこととする。

I. 事業活動

『1』研究事業

1. 今後の研究活動のあり方に関する継続的検討

高等研における研究活動の取り組みは、高等研創設以来40年に及ぶ研究事業を中心とする事業活動の脈々と続く活動成果に基づくものである。これからも学術研究機関として事業展開の在り方を問い続けることが肝要であると考える。

2024年度においても引き続き、高等研をさらには現代社会を取り巻く複雑な社会情勢を踏まえた今後の課題の探索及び掘り下げ・深化に基づき、高等研における今後の研究活動のあり方を、毎月開催する所内会合や外部有識者をメンバーとする研究企画推進会議等を通じて検討を進めることとする。

2. 2024年度の研究活動

高等研は1984年の創設以来、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」ことを基本理念とし、学問分野の壁を越え研究者が結集して、人類社会が直面する諸課題に関する学際的研究を進めている。人間をつよく意識し人々の生活や社会が抱える課題に対峙し、学術研究や社会の適切な方向性の提案、新たな活動の創出を目指してきた。学問領域や専門分野のみならず、世代、組織、国籍を越え、研究者が横断的に集い研究を進めるという特徴（Beyond Boundaries）は、今日まで継承されている。

2024年度は、2023年度に発足した自主研究と公募研究を推進すると共に、2023年度に続き研究公募を実施する。また、創設40周年記念事業として、新たな研究者制度を発足する。

(1) 自主研究

自主研究は、高等研の中核を成す研究である。研究代表者を中心とする研究組織により実施する。研究代表者は高等研が主体的に人選し、高等研の一貫した特徴であるBeyond Boundariesの研究基盤を有する研究を実施する。

高等研は、けいはんな学研都市地域という日本が培ってきた歴史、文化、芸術、技能、風土と先端研究とが交差する環境の中にあり、この地域の住人や職業人と物理的にも心情の面でも近い。人間や人々の生活を意識しながら、学術的研究に基づいて、課題の発見から解決までを総合的に取り組むことができる位置にある。自主研究においては、このような特徴を生かした研究を行い地域社会に貢献するとともに、学術研究や社会のあり方を考え、次世代を担う若者が希望を持てる未来社会の実現につながる研究活動を進める。

2023年度に発足した下記の自主研究については、2024年度を以って終了することを前提に、活動の充足と外部への発信及び必要に応じ取りまとめを行う。ただし、研究状況によっては、活動期間について検討を行うものとする。

1) 「科学技術の動向とロボティクスの将来— ロボティクスと家庭の関係 —」

研究代表者：小寺 秀俊 国際高等研究所副所長

(京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授、文部科学省技術参与)

概要：けいはんな学研都市がロボットおよびロボティクスの研究開発と事業化の拠点であることから、ロボットとロボティクスさらには、human augmentation（人間と技術の一体化による人間の能力の拡張）における研究開発の現状を調査するとともに、今後の方向性を議論する。

ロボットおよびロボティクスに関しては京都府による推進計画のヒアリング、ロボティクスに関しては理化学研究所のロボティクス研究等の状況や今後の方向性をヒアリングすると共に、Human augmentation 技術の今後の方向性とその倫理に関する議論を行い、結果をまとめる。

2025年度に、シンポジウムの開催、大阪・関西万博への出展と研究成果の発信を計画しており、2024年度はそのための準備も行う。

2) 「持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究」

研究代表者：有本 建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー

(科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授)

研究副代表・実行責任者：宮野 公樹 国際高等研究所客員研究員

(京都大学学際融合教育研究推進センター准教授)

概要：学問領域や分野、世代、大学の境界を越えて、研究テーマそのものを深掘りする全国規模の研究ポスター発表大会を2年間かけて実施する。全国を9地区に分け、各地区における幹事校を拠点に、その地区の研究者からなる100人規模の大会とする。

単に多様な学術分野が集まった発表ではなく、越境の工夫や、本音で対話できる仕組みを組み入れることで、自身の研究を深く問う場となることをねらう。共同研究の創出による研究の進展のみならず、研究者個々人の研究精神の深化を促し、さらにそれを全国規模で展開することで、我が国の学術界の基盤と文化の醸成を目指す。

2024年3月3日～6日に中国地区（幹事校：広島大学）にて開催の初回に続き、2024年度は5地区程度で開催する計画である。

3) 「人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究—関係性との関連を手がかりに—」

研究代表者：高見 茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー

(京都光華女子大学学長、京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授)

概要：健康や幸せを実現している人々に共通する要素として、「関係性」の存在（良好な人間関係、つながりの感覚）が指摘されている。予防医学等の観点からは、健康には「食事」「運動」の他に、「意識」が重要であるとされている。また、世界幸福度ランキングにおいても、「意識」と幸福度の関連が見てとれる。

そこで本研究では、健康と幸せを実現する「意識」をテーマとする。特に病気が劇的に寛解した事例に着目し、事例群に共通してみられる意識の傾向や要素の抽出を試みる。けいはんな学研都市地域住民の幸福度向上の手立ての一つとして、人を健康と幸せに導く「意識」を明らかにし、「先端幸福創造都市けいはんな」の実現に貢献することを目指す。

2024年度は、長寿地域の人々の特色・条件の探索と劇的寛解の事例の検討を行い、長寿で健康な人の意識、ならびに大病ののち劇的に健康を回復した人の意識の特徴を追跡する計画である。

(2) 公募研究

公募研究は、研究方針と課題観を同じくする外部研究者が構想する研究である。その目的は、学術研究の進展に加え、次世代の学術の芽の発掘と育成、若手研究者の支援、研究活動の多様性の確保、研究者ネットワークの醸成への寄与である。また、高等研の活動全般の周知の役割も果たすものと捉えている。

対象とする研究は、高等研の「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」という基本理念に照らして相応しく、将来新しい学術を切り拓く可能性を秘めた、学際

的な研究とする。例えば「人とはなにか」を問う研究などを含む、文理の境界を越えて根源的な問いに取り組む研究とする。

2024年度は、2023年度に採択した以下の研究を推進する。また、上期に公募ならびに審査を実施し、下期中に新たな研究に着手する。公募情報は、高等研のホームページやメーリングリストを活用し、研究者、大学、研究機関、高等研関係者などに広く周知する。また、公開されている研究公募データベースへの情報掲載も積極的に行う。審査は、公募研究審査委員会を設置し、書類審査と面接審査を行う。その際、2023年度の研究公募を振り返り、より有効な運営に努める。

1) 2023 年度採択研究：

「グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究」
研究代表者：新福洋子(広島大学副学長・同大学院医系科学研究科教授)

趣旨・概要：分野横断的な若手・中堅の研究者ネットワークを形成し、分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと科学者の役割を検討する。また、未来に続く若手世代がそうした議論に参加し、国際的な活動のスキルを向上することを目的とする。

具体的には、分配的正義、科学ディアスポラ、科学技術外交、特に現存する国際団体の役割に関する最近の動向について、文献調査、国際会議の参加者からの聞き取りによる調査を行う。また、国際会議に合わせてイベントを組み、議論を展開する。それらの議論の結果を積み上げ、論文として発表する。プロジェクトの終盤には、この活動を継続するために必要な組織体制を構築すべく、ネットワーク内にて協議を行う。

2024 年度は、オンラインミーティングによる議論、文献調査、国際団体の役割や動向に係るヒアリング、STS Forum などの日本開催国際会議のサイドイベントの準備ならびに実施、国際共著論文執筆の準備を行う計画である。

(3) 研究企画推進会議

本会議の俯瞰的、長期的視野からの助言及び提言は、研究活動の推進や方向性の検討、高等研の将来構想を進める上での指針となっている。引き続き、本会議からの助言や提言を研究事業に反映させることとする。本会議は 2024 年度を以って第 5 期が終了するため、2025 年度 4 月の第 6 期始動に向けた準備を行う。

さらには、将来構想検討会の議論の進捗や検討内容を側面から検証(サイドチェック)して貰い、大所・高所からの助言・提言により、将来構想(マスタープラン)の補強を図ることとする。引き続き本会議からの助言及び提言を研究事業に反映させることとする。

(4) 高等研版白眉研究者制度と特別研究員制度の円滑な立ち上げと運営(高等研創設 40 周年記念事業)

現在の学問は複雑化や細分化の流れの中で、新たな越境領域の必要性が向上している。また、学問を取り巻く状況は、若手研究者のポストの減少、高齢化社会と長寿化に伴う研究者人生の延長の必要性といった課題を抱えている。このような現状を踏まえ、高等

研版の白眉研究者制度と特別研究員制度(仮称)を円滑に立ち上げることとする。

白眉研究者制度は、ポスドク研究者への金銭的支援と身分の提供を行うものである。新たな研究領域の芽を発掘すると共に、世界トップレベルの研究者として活躍し次代の学術を担う人材を育成することを目的とする。支援の原資は寄附を期待するが、初年度は原田寄付金を活用する。

特別研究員制度は、定年を迎えた教員に研究者への身分を付与し、研究を継続できる場を高等研に確保するものである。対象は競争的資金の獲得者に限定し、関連費用は同資金から支弁する。

『2』交流事業・人材育成事業

高等研における研究活動とともに、一方の事業活動の柱として定着した交流事業の継続性を踏まえた事業企画を進める。

交流事業においては、世界の最先端の英知を結集し、議論を深め、その活動による研究成果や知的資源を広く社会に発信・還元していくとともに、産・官・学のネットワークとつながり、研究成果が社会に活かされるような事業、社会的な要請やニーズに対応できる事業を積極的に推し進めることとする。

2024年度においては、こうした高等研の交流事業の基本を踏まえるとともに、以下の原点をおさえた取り組みを進める。

【原点】奥田東先生が触発を受け、けいはんな学研都市建設の契機ともなったローマクラブの提言『人類の危機レポートー成長の限界』（1972年）から半世紀を経た今日、深刻さを増す危機的世界を正視しつつ、けいはんな学研都市の産・官・学のほか住民の皆様との連携をより一層深め、危機意識を共有した上で、「人類の未来を展望した文明論的課題は何か」という問いを掲げる。

〔2024年度交流事業の概要〕

(1) エジソンの会

「エジソンの会」の活動は、引き続き、世間の関心の半歩先を行くようなテーマを選定し、そのテーマにふさわしい適切な講師に登壇をお願いして、年4回の開催を目論む。

1) これまでの取り組みと2024年度の方針

2016年6月のエジソンの会発足以来、過去45回(2024年3月開催含む)の会合を開催してきた。発足当初は、取り組みの核となる科学技術シーズの領域を人工知能(AI)として、その焦点を絞ることとし、当初はAIとは何かを中心に据えて、AIの最新動向や知識の共有とともに、AIのもたらす社会への影響を考え、その指針を確立することとして活動した。

2019年度からは、未来社会の在り方を想定して、そこから見出される科学・技術・社会の相互作用の重要性を踏まえ、そのための「ネットワーク構築」と「協業を生むための土壌づくり」に主眼をおいた活動を実施している。また、我々の生活や社会に大きな影響をもたらすと思われる分野・技術に焦点を当てて、未来に向けて取り組むべき研究対象や技術開発対象は何かを考察した。

2024年度は、前年に引き続き、サイエンスの進歩とそれによるテクノロジーの発展を踏まえて、未来社会の在り方を想定して未来を考える機会とする。

2) 2024 年度の計画

「未来に向けて取り組むべき研究開発」を年間テーマとして、未来社会におけるいくつかのテーマを想定し、そこで重要となる分野と技術に焦点を当て、参加各企業・機関が個々のニーズへの展開を想定することが出来るようにする。

○原則として年度内 4 回の会合の開催を予定。

○毎回、2 名ないし 3 名の講師を招く。

○開催場所：国際高等研究所「レクチャーホール」

○開催方式：対面方式（クローズドな会合の特色として「ここだけの話」を披露頂く）

○取り上げるテーマ案は以下の候補から検討して絞り込む。

・『宇宙 ～多岐にわたる研究領域と最先端テクノロジー～』

第 2 弾：「人類の生活圏を宇宙に広げる ～月/火星への挑戦」

第 3 弾：「宇宙資源の活用 太陽エネルギーから資源探査まで」

・『人工知能の最新動向 ～深層学習の進化と社会実装～』

・『分散か集中か ブロックチェーンの可能性が未来を変える～WEB3 と DAO～』

・『ナノテクノロジーが拓く未来 ～数々の応用領域と革新的な進化～』

生命科学、材料科学、エレクトロニクス、環境・エネルギー

・『未来を予測する ～シミュレーション技術の現状と展望～』

・『サイバーセキュリティの現状と対策 ～今、世界で何が起きているのか～』

(2) 「ゲーテの会」を中核とする<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

1) これまでの取り組みと 2024 年度の方針

本プロジェクトは、けいはんな学研都市建設のきっかけとなった『成長の限界—人類の危機レポート』（ローマクラブ、1972 年）から 50 年目を機に、2022 年度から開始している。高等研の原点に立ち返って未来を考えるコンセプトの下に、「ゲーテの会」での問題提起を踏まえ、それに続く「meta 鼎談」、「市民懇談」では、専門家と共に、市民をはじめ立地研究機関・企業等の参画の下に、より深く、より多面的に、そしてより広く討議する場を提供している。

2024 年度（第 3 年度）のプロジェクトの共通テーマを「生命論」とし、2022 年度（初年度）の「量子論」、2023 年度（第 2 年度）の「文明論」を受けて、人類的、文明論的視点を持って議論する予定である。

2) 2024 年度の各事業の計画

①満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

2013 年 8 月に有志の企画で発足し、2013 年 12 月開催の第 5 回から高等研の正式な交流事業と位置付けられ、2024 年 1 月末までに計 92 回を開催。高等研が関西文化学術研究都市の中核機関として「知的ハブ」機能を果たすイベントの一つとなっている。発足以来、概ね 2 年間で 1 ステージとして主テーマを掲げ、事業を展開してきた。第 1 ステージ：「経済至上主義、科学技術至上主義からの脱却を求めて」、第 2 ステージ：「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」、第 3 ステージ：「未来に向かう

人類の英知を探る」であった。2019年度からの第4ステージでは『「新しい文明」の萌芽を探る』をテーマにして実施してきた。

2021年度からはコロナ禍の影響を回避するため、開催形式を大きく変更して、オンライン方式による開催、あるいはオンライン方式と対面方式を併用するハイブリッド方式により開催した。その結果、より広い地域から、より多くの参加希望者に貴重な学びの機会を提供することができ、参加者から好評を得ている。

2024年度（第3年度）は、<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトの共通テーマが「生命論」であることから、次の内容で対話型講演会を開催する。

－ 第94回「ゲートの会」 －

開催日時：2024年5月23日（木）18:00～20:00

演題：生命哲学の精華、「空海」の生命論。その可能性。（仮題）

講師：竹村 牧男氏（東洋大学 名誉教授）

開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式

場所：国際高等研究所 コミュニティホール

また下期にも、「生命論」のテーマを念頭に置いて第95回「ゲートの会」を開催する計画とする。

②meta 鼎談（哲学×科学×技術）

本企画は、『「哲学」なき「科学」／「科学」なき「技術」』、逆に『「技術」なき「科学」／「科学」なき「哲学」』の弊について強い問題意識を持って企画構想したものであり、「ゲートの会」で論じられた課題を踏まえて、「哲学」、「科学」、「技術」の異なる分野の専門家3名を招聘してクロス討議（鼎談）を行い、「新たな文明」の萌芽の探求に繋げていこうとするものである。この鼎談の参加者には、後に続く「市民懇談」にも対面参加を求め、参加者には事前に質問事項や討議希望事項などをアンケート調査することで市民参画型の鼎談として開催する。鼎談の様子はzoom ウェビナーにより事前登録者にオンラインで全国配信する。

2024年度（第3年度）は、その共通テーマ「生命論」に従って、以下を開催計画とする。

－ 第3回「meta 鼎談」 －

期日：2024年7月13日（土）14:00～17:00

モチーフ：生命（いのち）の輝きを探る（仮称）

講師（予定）：

- ・宗教哲学分野：松山 大耕氏（京都 妙心寺 退蔵院 副住職）
- ・生命科学分野：平野 俊夫氏（大阪大学 前学長）
- ・文化人類学：石井美保氏（京都大学 准教授）

開催方式：ハイブリッド（対面+オンライン）方式

場所：国際高等研究所 コミュニティホール

③市民懇談（roundtable）

「皆が専門家、皆が素人」のキャッチフレーズの下に、文明論的課題を、住民自身が能動的、かつ、主体的に議論し、「新たな文明」の萌芽を探究しようとするものである。討議項目・内容についても、対面参加者の幾人かに話題提起していただき、それ

を受けて、メンターのご指導と、モデレータの進行の下に議論していただく。討議に参加される対面参加者は、主に、けいはんな学研都市の市民や立地研究機関・企業の関係者、学生など「meta 鼎談」の参加者で、「市民懇談」に先立って開催される「ゲートの会」や「meta 鼎談」の内容を踏まえて、一定の知見をもって参加していただくこととしている。懇談の様子は zoom ウェビナーにより事前登録者にオンラインで全国配信する。

2024 年度（第 3 年度）は、その共通テーマ「生命論」に従って、以下のように取組む計画とする。

－ 第 3 回「市民懇談」 －

期日：2024 年 9 月下旬（土）14:00～17:00

モチーフ：生命（いのち）の輝きを探る（仮）

モデレータ：（未定）

メンター：meta 鼎談の講師（予定）

開催方式：ハイブリッド（対面＋オンライン）方式

場所：国際高等研究所 コミュニティホール

④「フォローアップ・WS（ワークショップ）会議」の開催

「ゲートの会」「meta 鼎談」「市民懇談」に係る講演録等のブックレット化を図り、本プロジェクトの中心的参画メンバーの自律的学習（市民学習サロン等）の便を図るとともに、同参画メンバーを中心に 9 月以降に「フォローアップ・WS 会議」を複数回開催し、多様な関係者から、本プロジェクトに関して種々ご意見を頂戴し、それらを基に次年度の企画内容の充実につなげる予定である。

(3) IIAS 塾ジュニアセミナー及び関連事業

「IIAS 塾ジュニアセミナー」の活動は、2023 年夏季から、その原点とも言える対面・合宿方式に戻しており、参加者相互が文字通り寝食を共にし、議論・交流する機会を提供していく。

また、2022 年度から始めた「IIAS 塾ジュニアセミナー・ホームカミング」は、今年度は第 3 回目となり、実施時期を試行する意味で、2025 年 2 月の開催を目論む。

1) これまでの取り組みと 2024 年度の方針

「IIAS 塾ジュニアセミナー」の活動は、「ゲートの会」等の講師の協力を得て、その講演録を基に学習教材（テキスト、講義動画等）を作成し、18 歳前後の高校生・大学生を対象に、学校の教科を超えて、次代を照らす素養（リベラルアーツ）の学習機会を提供することとしている。

開催形式は、基本として、対面・合宿方式とし、参加者相互が文字通り寝食を共にし、議論・交流する機会としている。

2016 年 3 月の初回開催から 2023 年度末までに 14 回の開催を重ね、受講生のみならず、教育関係者からも高い評価を得ている。2021 年度から、2023 年度までは（公財）三菱みらい育成財団の助成を得て、講義動画などによる事前学習を充実させてきたところである。

2023 年度夏季ジュニアセミナーは、コロナ前と同様の対面・合宿方式で 8 月 2 日

3日4日の2泊3日で実施し、受講者16名が参加し、講師4名、TA（ティーチングアシスタント）7名で指導に当たった。また、ジュニアセミナーの理念でもある理性（哲学）分野とともに感性（芸術）分野の学習を狙って、「体験学習（心身の学）」の分野を新たに導入し、「武道」をテーマに「もう一つの知、身体知」の学習機会を提供し、全人的教育の一助とした。

2024年春季ジュニアセミナーは、対面・合宿方式で3月23日（土）～25日（月）2泊3日の日程にて受講者13名で開催する。

2024年度も2023年度と同様の基本方針で取り組む計画である。

2) 2024年度の計画

- ー 2024年夏季ジュニアセミナー ー：人物学習型
期日：2024年8月上旬（2泊3日）
開催方式：対面・合宿方式 定員20名
基本テキスト：2024年春季と同様
講義動画：2024年春季と同様
- ー 2025年春季ジュニアセミナー ー：課題探究型
期日：2025年3月下旬（2泊3日）
開催方式：対面・合宿方式 定員20名
基本テキスト：未定
講義動画：未定

3) 「ホームカミング」事業

過去にジュニアセミナーを受講した経験者と過去にTA（ティーチングアシスタント）として協力いただいた方々を対象とする「ホームカミング事業」は、第1回：2022年9月17日（土）18名参加、第2回：2023年8月26日（土）12名参加であった。

2024年度も、ホームカミング参加者やTA、特任研究員のメンバーで企画会議を重ね具体的な計画を立案する予定である。現時点では、以下を予定している。

- ー 第3回ホームカミング ー
候補日：2025年2月下旬。
開催方式：対面方式
場所：国際高等研究所 コミュニティーホール
テキスト：公開済のジュニアセミナーテキストから選択する。

(4) 「けいはんな文化学術教育懇談会」の開催事業

2019年度から「けいはんな文化学術教育懇談会」を開催し、「IIAS塾ジュニアセミナー」の充実を図る観点からの意見集約を図っている。2024年度は、「IIAS塾ジュニアセミナー」に限らず、「ゲートの会」を中核とする<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトなどの運営に関しても、全体会合とともに、文化・学術・教育部会を設置し、専門家の知見を得て、その在り方等について議論する。

(5) 交流活動内容に係る情報発信

これまでの交流活動で紹介されてきた知見を広く一般に公開する取組みは、「交流活動の資料公開」として、2023年12月に開始したところであるが、今後も継続することとする。

1) 交流活動の資料公開

2023年12月において、これまでの交流活動で紹介されてきた知見を一般に公開を開始した。内容は2013年8月開始のIIAS「ゲーテの会」講演録に基づくブックレットとIIAS塾2016年春開始のジュニアセミナーテキストの2種類の合計約90本に関して公開準備が完了したのものから順次公開を始めている。これにより、新たに一般の市民、学生への学びの機会を提供している。

2) YouTubeを媒体とするイベントの動画発信

2020年秋から、ゲーテの会で招聘した講師に、開始前に10分程度のショートインタビューを実施し、講演の趣旨や、学びの在り方、参考書籍等に関してコメントを頂いている。編集した動画をYouTube高等研チャンネルで「国際高等研究所メッセージ #X」と称して公開している。(これまでに13件) これは、上記の「交流活動の資料公開」ページにもリンクを張って、活用を拡げている。

(6) 「学生の学生による学生のための教養講座」

学研都市のみならず、関西全体を視野に入れた更なる交流・連携に向けて、13大学・8研究機関が参加するけいはんな学研都市「大学・研究機関」共創会議(座長:松本紘所長)が、2022年12月にスタートし、○けいはんな学研都市の発信力の強化、○大学・研究機関の交流・連携の推進、○学研都市で取り組む最先端研究の「見える化」等の課題に取り組むこととなった。

1) 「学生の学生による学生のための教養講座」の実施

2023年度において、共創会議の議論の中で「若い世代が、将来、幅広い分野で活躍するために、専門分野以外の多様な人材と交流できる場が必要」との意見が拡がり、高等研が新たな学生向けプログラム「学生の学生による学生のための教養講座」の企画を実施することとなった。目的は、若い世代の人材育成プログラムの展開(持続可能な方式)と高等研及びけいはんな学研都市の事業活動の情報発信である。

2024年度においては、2023年度に立ち上げた当該教養講座が有効に機能するように、共創会議及び学研都市の立地機関と連携して実施する。

2) 学研都市の立地機関との協力

けいはんな学研都市「大学・研究機関」共創会議と連携し、研究者・研究テーマのデータベース化、活動の情報発信、研究者が参加学生に助言する仕組みの構築などを協力して実施することとする。また、けいはんな万博と連携したセミナー・イベントの開催を検討する。

『3』成果の発信

広く社会の動向を見極めながら、高等研における高度な研究活動を踏まえた存在意義の更なる訴求方策の検討（広義の広報活動）を進めることとし、より広く一般を対象とする発信力の強化に努めることは、公益財団法人である高等研にとって社会から求められる要件でもある。

一方、2020年1月に大口の個人寄付金の獲得となったが、潜在的に社会貢献への強い意志をお持ちの篤志家が居られる状況を踏まえ、高等研の活動成果や存在意義を積極的に社会に訴求する中で、新たな寄付の申し出に繋がる可能性があり得ることを経験したところである。

「社会に向けての成果の発信」は、高等研全体の重要な課題として共通認識を持つ必要がある。2024年度においても引き続き、効率・効果的な広報展開を実施することともに、高等研の事業活動を広範に訴求することにより、更なる寄付や外部資金獲得に繋げる努力を行うこととする。

『4』他機関との連携活動

(1) 2025年大阪・関西万博との連携に向けた取り組み

けいはんな学研都市では、2025年に開催される大阪・関西万博との連携を図り、「けいはんな万博2025」の実施に向けて、(公財)関西文化学術研究都市推進機構を中心に、2022年5月に「けいはんな万博全体構想」が策定された。2023年度には、この全体構想実現に向けて、より具体的な事業案を取りまとめた「基本計画」が策定され、「けいはんな万博運営協議会」が発足し、共同代表には松本紘所長が就任した。また、高等研は同協議会の幹事およびサイエンス&アート部会の取り纏め役となった。

2024年度は、万博プレイベントとして、シンポジウム、立地機関等による展示会などの開催が予定されており、高等研もこれらの取組みに参画していくこととし、大阪・関西万博のメインテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に関連したテーマでの「ゲーテの会」等の開催や「自主研究」の研究成果を万博関連イベントに活用するなどの企画検討を行うこととする。

II. 法人運営

『1』理化学研究所退去に伴う2024年度予算額減少とその対応について

理化学研究所の関西地区研究支援部門が高等研の研究施設「研究棟B 2階」に2017年1月に入居以来、高等研と協働した活動を進めてきたところ、2023年8月を以って退去した。これに伴い、2024年度収支予算案については、理研による施設使用料収入約1,800万円が減収となる。

2024年度収支予算案の策定に当たっては、下記の収支改善策を具体的に検討することを通じて、事業内容と支出項目を精査して可能な限り支出を抑える工夫を行うとともに、外部資金の積極的な導入を図る等、収入増に繋がるよう努力を行うこととする。

収支改善策

- ①運用資産の入れ替えによる運用益の増収
- ②企業版ふるさと納税及びクラウドファンディングなどの活用による寄付金の受け入

れ

③業務効率化による時間外労働の削減

『2』資産運用

資産運用の改善については、2018年度に資産運用規程を改訂し、資産運用基準を見直し、2019年度以降においては、投資対象範囲を株式にも拡げて資産運用方針（ポートフォリオ）を策定し、運用利回りの低い投資対象の見直しを図るなど、収益性と安全性のバランスを考慮した効率的な資産運用の改善に努めているところである。

2024年度においては、理化学研究所の当研究所施設からの退出に伴う収入減少に対処するため、下記の運用方針を遵守しながら、運用資産の見直しなどにより、3.5%を運用利回り目標とする。なお、運用にあたっては、下記①～④の指針に基づき、世界最大規模の資産運用者である年金積立管理運用独立行政法人の基本ポートフォリオ（国内株式、国内債券、外国株式、外国債券、各25%）を参考として、異なる地域、通貨、資産（債券、株式、不動産）に分散投資する。

①運用益の追求：一定水準以上の安定的な利子配当益の追求

②評価益の追求：長期的な資産価値の増大

③運用元本の保全：価格変動リスクの抑制

④資産運用のガバナンス強化：組織内における資産運用方法の情報共有

また、投資対象とする資産は、次の条件のいずれかを満たすものとする。

①価格の透明性、取引の流動性のある確立した市場（証券取引所など）で売買可能

②投資適格格付けを有する

『3』高等研施設の利用促進

文化学術研究の推進など法人の公益目的に資するイベント、セミナーなどについては、外部の研究機関・大学・企業などに積極的に働きかけて、高等研施設の提供を図ることとともに、けいはんな万博の来場者の拡大に貢献することを目指すものとする。

『4』賛助会員制度を含む多様な寄付受け入れの在り方の検討

従来、高等研においては、賛助会費収入が収支ギャップを補う収入源となり得る方策として期待されることから、「賛助会員制度」を念頭に検討を進めてきたところである。

一方、昨今話題となる「企業版ふるさと納税制度」や「クラウドファンディング」は、新たな寄付制度として注目されているものである。

2024年度においては、賛助会員制度と、企業版ふるさと納税及びクラウドファンディングなどの多様な寄付制度の比較検討を詳細に進め、各種寄付制度の活用方策を探ることとする。

Ⅲ. 2024 年度（令和 6 年度）財務・収支計画

『1』経常収益

資産運用益は、理化学研究所の当研究所施設からの退出に伴う収入減少に対処するため、2024 年 3 月に運用資産の入れ替えを行ったことにより、前年比 2300 万円増の 1 億 3800 万円を予定している。また、公募研究および白眉研究員制度の開始など、研究事業をより充実させるため、寄付金からの振替額は前年比 500 万円増の 2000 万円とする。

また、理化学研究所退出により施設利用金は 1800 万円、三菱みらい育成財団の助成期間終了により、民間助成金は 600 万円、それぞれ減少する。

上記により、今期の経常収益は前年比 400 万円増の 1 億 6500 万円を予定している。

『2』経常費用

研究事業の充実などに 650 万円の費用増を予定している。また、還付された消費税の一部再納付として 500 万円を予定している。

業務の効率化、経費削減に努め、交流事業費、修繕費などで合計 1500 万円の費用削減を見込んでいる。

上記により、今期の経常費用は前年比 400 万円減の 2 億 600 万円を予定している。

『3』最終収支

上記により、今期の最終収支はマイナス 4100 万円、前年比では 900 万円の改善を予定している。なお、減価償却費用として 5400 万円計上しており、キャッシュフロー収支は 1300 万円のプラスとなる予定である。

以上